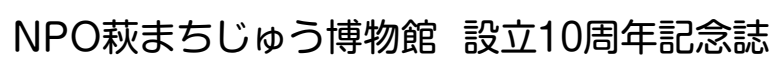


～これまでの10年 これからの10年～



2004 – 2014

目 次

設立趣旨

理事長あいさつ

市長メッセージ

座談会 ～これまでの10年 これからの10年～

活動記録 ～これまでの10年を振り返って～

ひとことメッセージ

NPO萩まちじゅう博物館の歩み

編集後記



設立趣旨

萩には、毛利藩政期260年間に形成された城下町のたたずまいが今日まで継承されており、日本で唯一の「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」となっています。

これまでも貴重な歴史・文化資源として維持、保存が図られてきた史跡や文化財に加え、萩のまちには、観光客も、そしてもしかすると私たち市民でさえ気づいていない、史実や伝承、自然や町並み、産業や人々の暮らしなどの貴重な「都市遺産」が息づいていると考えられます。

現在、萩市では、都市遺産がいたる所にかげがえのない姿で残る萩のまち全体を一つの博物館として捉え、これらの保存及び活用によるまちづくり、観光地づくりの取り組みを「萩まちじゅう博物館構想」と名付け、萩の更なる魅力づくりが市民と共に展開されようとしています。

この「萩まちじゅう博物館構想」に基づき、市民及び行政と協働して、萩市の都市遺産を再発見し、その情報の管理や活用などを行うことで、都市遺産を守り育て、次世代に継承していくことを目的として特定非営利活動法人NPO萩まちじゅう博物館を設立します。



ごあいさつ

萩まちじゅう博物館構想の基で平成16年6月に立ち上げた特定非営利活動法人NPO萩まちじゅう博物館（以下「NPO萩まち博」）は、行政はじめ多くの市民の方々からお力添えを戴き、一昨年で10年目を迎えました。

今から約400年さかのぼった時代の生活文化が、今もなお市民生活の至る所で営々と大切に受け継がれておりますが、しかし、生活の便利さや近代化の波に押されて失われて行く文化遺産も多く、萩市はこのかけがえのない遺産を大切に保存・活用、そして、埋もれている遺産の再発見等々を市民と協働で新しいまちづくり「萩まちじゅう博物館構想」として次世代に継承していくことを目的として、保存活動と魅力あるまち萩として多くの訪れる観光客を迎え入れる体制を整えました。

NPO萩まち博は、この萩まちじゅう博物館構想を受け入れ平成16年4月にNPO設立準備会を立ち上げるとともに、同年6月にはNPO萩まち博設立総会を開催しました。以後、萩博物館の管理運営を受託して管理活動と入館者へのサービス活動を実施する運営活動を開始しました。

そして、まちじゅう博物館構想の主旨を以下の4項目に分けて活動の重点目標としています。①拠点施設（萩博物館）の管理運営と文化財施設の利用と活用、②おたから（都市遺産）の再発見やその情報の収集と発信、③公共機関や諸団体が行う萩まち博推進事業の地域活動への協働参画（交流活動）④学芸サポートと積極的な自主ボランティア活動によるまちづくり推進（文化の発展）

これらの主旨を達成するために、現在23の分野で活動をしていますが、今後の活動としては、3年後に迎える明治維新150年の節目と明治日本の産業革命遺産（世界遺産）そして、萩ジオパーク等々を萩まちじゅう博物館の推進事業として活動に取り組んでまいります。

萩博物館と協働事業で力を合わせて広大な地域に分散している地域団体をネットワークの力で情報の収集・集約につとめ「まちじゅう博物館」の中核として、より親密に関係を深め行き、また、各地に散らばっている文化財施設や民間施設等の公開されているものを地域に親しまれる施設としてNPOやその他の団体（グループ）と積極的に利活用してまいります。

終わりに、NPO萩まち博にご支援いただいた関係機関、諸団体の関係各位に対し心から厚く感謝とお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

平成28年3月

特定非営利活動NPO萩まちじゅう博物館

理事長 須子 義久



市長メッセージ

NPO萩まちじゅう博物館は、平成16年に設立されて以来、萩市と協働のパートナーとして「萩まちじゅう博物館」の実現に取り組んで来られました。早いものでNPOの設立から10年が経ったことになります。

皆様方には、平素から萩市のまちづくりの基軸である「萩まちじゅう博物館構想」の推進のために、尽力をいただいておりますことに対し、改めて厚くお礼申し上げます。

また、平成26年には10周年を記念して11月1日から16日までの期間中、萩博物館を主会場にNPOまち博の班活動や取組などに関して様々なイベントや展示が催され、これまでの10年間の活動が披露されました。皆様方の並々な熱意と努力に心から敬意を表する次第です。

萩まちじゅう博物館と萩博物館も、平成16年の11月11日、萩開府400年の記念の日にオープンしました。NPOまち博同様に10年を迎え、平成26年11月11日には多数の関係者の御臨席のもと記念行事を行うことができました。

NPOまち博は、まち博の中核施設である萩博物館の管理・運営はもちろん、萩の歴史・文化・自然に関する「おたから」の収集、整理、情報発信など、地域に根ざした活動を積極的に、きめ細かく展開され、萩のさらなる魅力づくりや「心のふるさと・萩」のおもてなしに大きく寄与されています。

今や「萩まちじゅう博物館」は、市民とともに進める「まちづくり」の先駆的な取組のモデルとして高い評価を受けています。先般は、皆様の活動が日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産に登録されました。誠に喜ばしく、心からお祝いを申し上げます。

近年では、国内はもとより中東の国ヨルダンのサルト市が、萩のまち博をお手本にまちづくりや観光開発に取り組むなど、世界的にも注目されるものとなっています。

去年は、大河ドラマ「花燃ゆ」が放映されました。また、7月には萩の5資産を含む「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産への登録も実現いたしました。本年1月には、明倫小学校跡に「世界遺産ビクターセンター学び舎」もオープンし、NPOまち博に管理・運営を担っていただいています。今年は日本ジオパークの認定も目指しています。さらに2年後の平成30年（2018）には、明治維新150年の大きな節目も迎えます。

萩市といたしましても「萩まちじゅう博物館」の新たな段階や明治維新150年に向け、引き続き様々な施策を総合的かつ積極的に展開しているところです。

皆様方も、今後とも「萩まちじゅう博物館」の発展のため、なお一層の力添えをいただくようお願いいたします。

終わりに、NPO萩まちじゅう博物館の今後のますますの発展と、皆様方の御健勝と御多幸を心からお祈りいたしまして、お祝いの言葉といたします。

平成28年3月

萩市長 野村 興兒



座談会

～これまでの10年 これからの10年～



西山徳明 教授



高木正熙 元理事長



久保田拓造 前理事長



須子義久 理事長

「NPO萩まちじゅう博物館」設立10周年を記念して、萩まちじゅう博物館構想の提唱者である北海道大学観光学高等研究センター教授西山徳明先生をお迎えし、歴代理事長との座談会を開催、「これまでの10年 これからの10年」をテーマに、NPO設立の経緯やこれまでの10年間の苦労話、そしてNPO萩まちじゅう博物館のこれから進むべき道などについて、熱く語っていただきました。



西山：NPO萩まちじゅう博物館の設立までの経緯については、多分皆さんが係わられてない時のことです。私からまず話をさせていただきます。

NPO萩まちじゅう博物館の設立経緯 新しい博物館をどう運営するのか

西山：そもそもこの「NPO萩まちじゅう博物館」（以下NPO萩まち博）という考えが始まったのは、建物の外構工事などがまだ整備途中ながら、萩博物館の建物が竣工したばかりの2003年の秋頃でした。このころ度々萩に足を運び、立ち上げの準備について、市役所の方々と話をしていました。そのなかで、「こんなに大きな施設ができて、これをどう運営するんですか」という話をしていたんです。



萩博物館を コアミュージアムにするために

一方では、萩博物館を「萩まちじゅう博物館」のコアミュージアムにしなければいけないと私も提案した責任上から、運営のあり方についてアイディアを出さなければならないとも考えていました。実際にできた現在の「無料ゾーン」を見ると、広い面積が確保されており、ここにどれくらいの人達がスタッフとして詰め、運営していくかということを実際に考え始めると、学芸スタッフの人数が限られており、役場が直接的に割ける人数も限られている中でどうしたらいいか、という話をまさにしようとしていたところでした。

NPO法人という選択

この頃ちょうどNPO法が1998年に施行され、全国でもまだまだ手探りだったのですが、どうもNPOというのは使えそうだと考えました。県知事認可で比較的簡易に設立できるにもかかわらず、いったん法人の認可を受けると、例えば様々な事業の受託団体になれるとか、いろんな補助金を取りやすいとかのメリットがあり、責任主体としての法人化というものは、いろんな活動ができるとわかりましたので、NPO法人を一つ立ちあげたらどうですかという話を、私から開館ちょうど一年前に提案したのです。



2003年11月 建物完成当時の萩博物館

将来のまち博を担う市民を巻き込もう

そのためにはNPOに何をしてもらおうかというミッションが必要だし、既にある萩博物館の友の会などファンの方々の集まりやボランティアを萩市内でやっておられる方々とか、将来萩まちじゅう博物館が形になってきた時に、力になってくれるような方々を巻き込む形だったら、NPO法人が作れるだろうし、その半分はボランティア、半分はもしかしたら多少のアルバイトというか、そういうことを組み合わせて、萩市が準備できる予算を最大限に使って、この広い博物館を運営できるような、そういうことができる「NPOがいいんじゃないですか」と私が叫んだら、柳井さんだったかな、「NPOいいですね。是非やるべきではないですかね」となりました。

だけどそれをやるんだったら、市の方もちゃんとスタッフを雇わなければだめですよと、話をして、「誰かやってくれる若い人がいたらいいんですけどね」と言ったら、その場にいた当時九州芸術工科大学の大学院生で調査に来ていた山本（旧姓中尾）明日美さんが、「私がやります」と手を挙げて、というようなことがあったので動き始めたというのを鮮明に覚えています。

NPOによる運営のイメージ

そういう話ですから、普通のNPOと違って、既に思いがある人達がおり、その人達の思いを何とか損なわない形でというか、今やっているモチベーションを失わない形で求心力を持ったNPOにできないものだろうかということが、最初に我々が一所懸命考えたことだったのです。

ともかく私が思ったのは、この広い空間を無料

ゾーンとして、コアミュージアムとして使うにあたって、基本的に萩の地元の方々が博物館スタッフとして、ユニフォームを着た人がそこにたくさんいて、グッズを売るところにもいる。レストランにもいる。

それから、どう萩をまわったらいいか、どこに何があるか、どこに行ったらおいしいものが食べられるかなどを含めて、対面でいろいろと萩をアドバイスしてくれるような人がこのフロアにいて、訪問客を一所懸命もてなしてくれることができないかということなんです。

お手本は宮崎県綾町

このアイディアの原泉は宮崎県の綾町にありました。延岡の方から国道を通って綾町に入っていくと、手前は一面水田の田園風景が広がっていて、奥には照葉樹林の深い山がある。そこが1980年代の終わりから1990年代の初め頃に注目を浴びておりました。

その入口に綾駅という駅があるのですが、これが「道の駅」の走りなんです。まだ、国土交通省が道の駅の事業をちゃんとやり始めて無い時に「綾駅」という、ロードサイドのドライブインというか案内所なんですね。これが「道の駅」のモデルになっているのだと思います。

情報を受け渡す場所としての博物館

そこに入ると必ず車を駐めてここで情報を取ってくれと書いてあるのです。入るとおばちゃんか一人だけカウンターの中に立っていて、それで来たお客さんにお茶を出しながら、いろんな村の話をしてくれて、ああなるほどと思って、それから村に入っていくと、非常に素晴らしい体験ができるわけです。そんなにお客さんがガンガンくるようなところじゃないんですよ。

だから、萩の場合もっとお客さん沢山来るし、一気にも来るし、そういう人達に対面しながら案内してあげるような仕組みを作れないだろうかというような事が、まず最初のイメージとしてあった訳です。

実際には博物館を運営する上で必要となる清掃の問題であつたりとか、チケットのもぎりの問題

とか、館内の案内ボランティアの問題とか、そういういわゆる接客スタッフみたいな部分と、それから学芸をサポートする学芸スタッフみたいなもので、構成されるのかなとかいう話で、話が少しずつできてきたわけです。



高木：実はその前にひと騒動あるんです。

NPOまち博設立までの苦労談

博物館ボランティア講習受講者との混乱

高木：当初、萩博物館の運営は有償ボランティアでということで話が進んでいて、そのために100人を超す人たちが1年間講習を受けて準備をしていたんです。ところが研修を終え、修了書を受取り皆さんが自宅待機をしておられたときに、萩博物館の運営はNPOでという話になって、今までの準備は何だったのかという声が上がって、混乱した時期があったんです。

その混乱のさなかの平成16年4月1日に萩まちじゅう博物館長に就任し、2ヶ月余り後の6月18日にはNPO萩まちじゅう博物館を立ち上げることとなったんです。それで、混乱を收拾するために、研修を受けた100人を超す人たちにNPOの立ち上げに理解を求める文書を出して收拾を図ることにしたんです。

6月18日までの混乱は大変なもので、現在NPO活動の中心となって頑張っておられる方々を中心に、NPOの立ち上げについて多様な意見をいただきました。そうこうしているうちに、NPOの理事長をということになって、萩の事もよくわからな



2004年8月 会員を前に説明をする高木初代理事長

い、ましてや西山先生のまち博構想への理解度も、道半ばという時期にですよ。ほんとうにすごいところですよ、萩市は。

なぜNPOの枠組みで混乱したのか

西山：今の話で、少しお尋ねしたいんですが。

NPOというのは枠組みに過ぎない訳です。要は運営組織をどうするか、だけの話であって、100名を超す人たちからなる有償ボランティアを、NPOの組織に組み込むことは、何の問題もないような気がするのですが、NPOがダメだと、どうして対立したのでしょうか。

高木：有償ボランティアということで集まった皆さんは、NPOについて、十分理解をされていなかったと思いますよ。私も一所懸命勉強しているところでしたから。最初に言ったように、修了書を渡した後1年くらいほったらかしにされて、何の説明もなく突然にNPOで運営するという話になったから混乱が生じたんですよ。



須子：有償ボランティア募集が市報に掲載され、それに多くの方々が応募されました。大部分の方々は退職者でした。約一年間5～6

回の講座が開催され受講することを求められましたが、いつのまにか2名の者が採用されていたのです。受講したことが何であったのか、より話がややこしくなっていたんですよ。そうこうしているうちに、NPOの募集があつて、多くの人からNPO活動に申し込みがありました。

高木：懐かしい話をするなかで、NPOの話がなんで混乱するか分からなかったんですけども、やっと今分かったということです。

須子：NPOの立ち上げの経緯について西山先生の話をお聞きして理解できました。だから現在も、我々会員がNPO活動を続けているんだと理解できました。

西山：そうであればいいのですけどね。



NPOまち博の今後に期待すること

西山：それでは、ここからは「NPO萩まちじゅう博物館の今後に期待すること」についてそれぞれの方から話をしていただきましょう。

軸足を萩博の管理運営からサテライトへ

高木：新しい博物館の管理運営にNPOが携わるということで、まずはここから始めて、NPO会員の皆さんの頑張りのあつて、現在は順調に管理運営が行われていますよね。ですから、萩まちじゅう博物館を創造するということに、私の代には軸足が移らなかったんですよ。

活動を活発化してサテライト、トレイルというものの認識を、ということで、今ものすごく盛り上がってきたんですけども、その間空白が何年間かあったんです。これから先の事を考えた時に、今町内会がやってたり、ものしり博士検定の修士博士の会などの活動をまち博そのものが音頭を取ったりして全市的に、行政の部会と、こっちは民間ですから民間の組織が同じように協力を深めて進めると良いですね。

例えば土原なら土原に地区部会もあり、土原歴史散策ぶらぶら通り委員会もあるんですが、理事長にお願いしたいのは、これを一体的にまちじゅう博物館を推進するために連携を取っていくのに、もう一步踏み出すと、少し西山バイブルに少し近づくのではと思いますが。

民間の力をネットワークに

須子：今、会員は10年間続けてきた班活動に一所懸命努力を重ねていらっしゃると思います。それでは

11年目からは何を狙うかというのが、今問われるネットワークなのですね。このことについては「萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業」（以下文活事業）で、これまで2年間やっています。その活動に芽が出て、今から花が咲こうとしておるところなのですけど、以前に高木館長の時代によく言われたのが、早くネットワークを構築し活用したらと…、民間のネットワークが無いばかりに、我々の活動が横に広がらず遅れました。「まちじゅう博物館構想」の4つの項目の推進が遅れました。

新しい発見や色々な情報を発信することとか、その地域で生活する方々の心が休まるような、心に残る風景というものをもう少し再発見してみる事の出来る活動を起こすのに必要なネットワークの充実を、官のお力を借りて作っていった訳なんです。それは各地区の公民館を中心に進めてきたのですが、民間の力（NPO萩まち博）ではとても弱いところがあるのですね。

NPO・地区部会・民間団体の関係の再設計

西山：今、お二方からいただいた話は、一つはやはり、最初にまち博の基本計画を立てた時の、



地域の方々との協働とネットワークで進める文活事業

基本的な重要な部分が、最初に高木さんがおっしゃってたような、(最初の2004年時点では5年といってもずいぶん長い感じがして、今や10年過ぎている訳ですが)、5年くらいをかけて、官が作った官製のNPOから、民間の完全に自立したものに移行していこうというようなことを、大きく謳って目指すべきですよと言っていたのを思い出します。

ただ実際に10年たった今の時点を見ると、多分それ(官的なものと民的なもの)が地域においても並立しているというか、NPO的なNPOだけじゃなく、その地域そのものですね。NPOは一つの傘だけど、これは緩やかな傘です。地域の人皆に強くNPO会員になりなさいとは言えない。

ある地域を見てみると、萩市の萩まちじゅう博物館推進委員会の部会としてある意味行政からの肝いりで任命され役目を与えられている人がおり、一方で地元から内発的に活動を始めた方々がいます。多分こうしたことを、再設計というか、次の10年かけて本当にどういう形にしていくかを戦略的かつ目的的に進めていかねばなりません。

もし次の目的がはっきりすれば、おそらく両者がその目的を遂行するために、今は二つの育ってきたものが、次に発展的にどう解消して、より地域にとって意味のあるものになっていくかという話がなされるべきであり、それを目指したらどうかというのが次の目標としてあるのではないかと理解しています。

よそのことを説明できる ネットワーク

それともう一つ、須子さんの話から思うのは、ともかくネットワークというと、ともかくいざとなったら連絡ができるみたいのところとか、いざという時にお互いに助け合えるというのは当然あるんです。しかし、萩まち博の強さというか、これからより強くなるために大事なことは、お互いがお互いをよく知るようになることだと思うのです。

拠点(サテライト)、拠点の人が、自分の拠点のことに詳しいのは当たり前です。しかし拠点に対する詳しさも、もっと萩博の学芸員の方々とかとのやりとりを通じて、より正しい史実に基づいたきちんとしたストーリー、客観的に科学的に説明できるものとなることで強化されていくことが必要です。各々が好き勝手に話すのではなくて、きちんとした博物館という大きな後ろ盾のもとに話ができると、それぞれのストーリーが強化されていくと思います。

よそとの繋がりが 個々の強み・萩の魅力に

それぞれのガイドさんが話す内容が強化されていくということと、もう一つはネットワークを通じて、お互いが、その拠点(サテライト)にはどんなストーリーがあってどんな価値があって、自分の拠点とどういう繋がりがあるのか、こっちはどうかというようなことで、要するによそのこ



とを説明できるようになることが、実は個々の強みにもなる。すると、全体のネットワークというよりも、外から見た時に、萩がものすごく魅力的な観光目的地、ものすごく魅力的に見える最大の武器になる訳です。

お互いが勉強しあい、お互いが説明しあう

しかし、全国での事例には、お互いがお互いを生かし切れていない事例も多く見受けられます。その逆で今大事なのは、例えばちょっと大きな話になりますけど、今回、九州・山口の明治日本の産業革命遺産が世界遺産になるかも知れませんが（座談会当時）、大事なのはやはり萩の人が鹿児島のことを説明できるのか、福岡とか筑豊とかあるいは釜石のことを説明できるのかによって、やっぱりその釜石の人が萩に来るのか、萩に来た人が釜石に行くのかと、全然違ってくると思うのです。それを今文化庁なんかも、お互いが地域、地域でおらがおらがっていうのもいいけど、もうちょっとお互いが勉強しあって、お互いが説明しあえるようになってほしいというようなことを言っています。

萩を語れるようになるネットワークの活用

今すごくそういう機運、これまでは地域学で地域が地域のことを学ぶことが大事だ、一つ落とし込めば拠点が拠点のことを学ぶということと、拠点同士が知り合って萩を語れるようになるということと、これは言うは易しで実際は難しいのかもしれませんが、ただ皆がそう思ってネットワークを活用していけるようになると、すごく強くなるし、外から見るとものすごく魅力的になる。

また、「今日は浜崎しか来れなかったけれども次は佐々並に行きたい」とか、「今回は博物館近辺しか見れなかったけど次は浜崎に行こう」とか、何かそういう風な、いろんな次の観光客というか、最初は何となく来た人が、本当に萩を知って訪れるし、深く付き合ってくれるみたいなことがすごく重要なことであるのです。

文活事業のネットワークをどう活用するか

そういう意味で官が主導して始めたものが、本



佐々並市の交流施設として整備が進む小林家

当の意味で地域に定着して民という言い方がどうかかわりませんが、地域に定着するやり方と、その今まさに文活事業で行われているこの2年間の活動というのは、そういう意味でもその基本的な仕組みを萩地域全域、今はいくつかしかできないけれども、それに対して、まずはモデル的に示してくれている。だから、今度はこれをどう活用するかというのが、NPOでありまち博であり、NPOには属さないけど地域にいる方々を繋ぐ最大のモチベーションというか、次のまち博の10年が目指すものになるのではないかなという気がすごくします。

サテライト同士がライバル意識を持つこと

昨日私は佐々並で小林家住宅の拠点施設整備の委員会に出ました。浜崎町の旧山村家に続けということで、これから伝建地区で整備する拠点施設の整備についてですが、やっぱりあそこももっともっと浜崎に対するライバル意識を持ってほしいというか、旧山村家があれだけ地域の拠点となってお客さんにとっても非常に人気のある愛される施設となっているのだったら、それをもっと越えるものをまた佐々並でつくろうと思ってほしい。

浜崎に来て旧山村家を見た人には、「佐々並にも是非行ってごらんよ」と言ってほしい。「ここが面白かったのだったらあつちももっと面白いよ」と、お互いに言い合えるような関係を作っていくといいと思う。

萩市も限られた財政ではあると思うけれども、やっぱり確実にそういうところにきちんとター



浜崎サテライトの中心である浜崎町並み交流館・旧山村家

ゲットを絞って投資をしていくというか、予算を投入していくということを、少なくとも今の市長さんは一所懸命やられている訳です。昨日も夜ちょっとそういう話ききましたけれども。

概念から本当の展開へ

ですから、今取り組んでいる文活事業を通じ、10年前には、ぼやっと概念だけだったもの、5年前には浜崎だけにしかなかったものが、今度は本当に展開しつつあるという意味で、私は思ったよりも時間がかかっているという見方も当然あるかも知れないけど、確実に進んでいるということ、ものすごく素晴らしいと思うし、これは絶対に全国モデルになると思います。

博物館運営の充実がまず最初だった



久保田：今日、いろんなことがわかりましたね。嬉しかったです。いろんなことがわかって、知らないことがたくさんありました。

違うことやってたんですけどね。私は入った時、今考えたら失礼なこと言ったと思うんですけど、まちじゅう博物館というのは何なんだ？結果

的に絵を描いてくれと何回もいったんですよ。最後はこうなったらいいんだと、描かないんです。描かないということは分からないんだなと思ってました。分かりました。これは最初ですよ。考えてみたら、こっちも分からなかった。私も分からなかったんですけど、結局、私は平和主義なんで、館内の充実がまず最初だと思ったんです。僕はどうしても中の充実、安心してこの博物館が運営していける形を作りたかったので、何年かかかって中の充実をはかることがいろいろ出来たんです。

これから先は外へ向けて

今回、須子さんにお渡ししたので対外的な充実を図っていただきたい。これから先は中は安心して外に向けてどんどんいってもらえればいいと思います。中はもう大丈夫だと思います。そういう意味で私は今考えたら苦勞を両方の端でされて、私は中間のほかほかのところにて、中のことを中心にやってきたという気持ちになっているんですけど、それでも何か大変だったですよ。一応、高木さんから引きうけて丁度一番の反乱期だったかな？反乱されてがらがらやられて、最初2、3年は何とかそれは耐えたんですけど、よく8年間出来たと思います。

内から外へ、 古写真班も一つのモデル

高木：すでに外に向けて活動されている例もあるんですよ。残念ながら先般お亡くなりになりましたが、古写真班で班長として活躍された木村さんは館内の学芸サポート班から出発をして、古写真をデジタル化するのにずっとご苦勞されて、そして蓄積したいろんなものをもって、外に出て、例



積極的に外に出て活動する古写真班



例えば宮本常一の関係があるから大島に行ったり、市内の公民館などにでかけたり、いろんなことをしながら、展示活動とか講演活動なんかをするようになられた方がいるんですよ。ああいう人なんかは、僕は一つの典型だと思うんです。インナーでやったものをきっちりアウトに示していけるという、何かまち博らしいというか、そういう意味ではこれからもっと発展が出来ますよ。

西山：僕は外から見ていて、サテライトがなかなか立ち上がらないなと、思っていました。だけどそれは逆に言えば当たり前のことであって、久保田さんの話のように、当然現場で考える方からすると、優先順位を考えていくというよりも、先を考えてもなおさらここをやらなきゃいけないという風に思われてやられているというふうに、私は学びました。

だからあんまり考えていなかった私は、同時にやったらいいのではないかと、外の人間としては勝手に思った訳ですが、でもそれは私の方が間違いで、そんなことは出来る訳ないのです。力を結集してやらなきゃいけないことというのは限られているので、そういう意味で結果として私は教えられたし、逆にそういうことを外に向かって、萩を事例に話しています。

外へ向かって自らの活動を自らが説明

例えば今、ヨルダンに行っている話に飛びますが、ヨルダンに行ってJICA（国際協力機構）がスポンサーでしょ。JICAに説明する時に、今サルトという一つの町に関して、これまで散々、僕から言えば2007年からだから7年間やって来ている訳です。

だいたいプロジェクトを通じて関係する皆が結集するようになり、主だった政府関係とか地元の市役所とか、それから地元のNGOとかそういうところがやっと一つのテーブルについてちゃんとやり始めました。そうすると一気に話が進んでいくのですが、逆に対立もまたおきてくる。

その中で、だから私はこういう時こそ、やっぱり妻籠というか日本の町並み保存の動きに習って、もっとほかの地域とつながるべきだと考えます。ヨルダン国内のほかの町でサルトのような町をつくりたい、エコミュージアムとかまちじゅう博物館的なことをやりたいという都市が出てきている。何よりもヨルダン政府自身が、このサルトで蓄積された技術を移転してほしいと、よその都市にもと言ってJICAに要請して来るのですが、JICAはそんなこと分かりませんからね。とにかくサルトを成功させて下さいと、サルトが成功してモデルができあがったらそれを移転すれば良いじゃないですかと言うのです。

でもそれは運動をわかってない人の発想であって、一つに集中すれば一つが完成するっていうのは大きな間違いで、ある程度までは内に向かって行くのだけど、ある時期からは外に向かって、やっぱり自分達が自らの活動を説明していくことで、始めて自分達の最終的な形が固まっていくのではと考えます。もちろんこれは永久に固まりませんが、ただこういう運動論みたいなことを考えた時に、まさにまち博というのはこの10年を境にして大きな転機にきていますね。

NPOまち博の 次のステップへの自覚

今、新旧理事長の話を伺っていると、言葉の上だけでなく、自覚的にそういうふうな次のステップに踏み出すべき時期だというふうに思われていて、今回の文活事業を一つの大きなきっかけにして、次の10年を展開しようとしているように、今日の話伺いながら強く感じたところです。

今後のNPO萩まちじゅう博物館の活躍を大いに期待して、本日の座談会の締めくくりとさせていただきます。

活動記録 ～これまでの10年を振り返って～



NPO萩まちじゅう博物館 設立総会

平成16年（2004）6月18日、NPO萩
まちじゅう博物館が設立！



ショップスペースの下見

開館当初は「まち博ショップ」という
名前で始動、萩ならではの商品を集
め、販売



レストランスペースでの 打ち合わせ

萩の食材を使ったメニューを募集し、
開館当初は「まち博カフェ」という名
前で始動



萩博物館・ 萩まちじゅう博物館開館

平成16年（2004）11月11日、萩開府
400年の記念すべき日に開館



門松づくり

初めてのお正月を迎える萩博に何かで
きないかと会員が協力して準備



ワンコイントラストの開始

旧久保田家ほか市内文化財施設にワン
コイントラストボックスを設置



まち博ガイドの開始 (2006末まで)

萩博周辺の「まちじゅう博物館」を案
内する「まち博ガイド」をスタート



救急救命講習

来館者が万が一倒れた場合などに
も対応できるように講習を受講



昔のおもちゃで遊ぶ広場

5月の連休や夏休みに訪れる子どもた
ちが楽しめるコーナーとしてスタート



浜崎伝建おたから博物館に出展

浜崎の町家を使って活動成果の展示や上演、活動の体験等を実施



NPOまち博市民講座

まちじゅうの歴史・文化・自然などを専門家から学ぶ市民講座をスタート



一斉清掃(草取り)

会員が一同に集まり、萩博物館内の庭などの草取りを実施



消防・避難訓練

万が一の火災に備えて、消防訓練や避難訓練を実施



萩ふるさとまつりに参加

貝のアクセサリづくりや裂き織りなどの体験ワークショップを実施



ワンコイントラストボックス設置

萩博エントランスホールにもワンコイントラストボックスを設置



ボランティアメッセ2005 in萩

NPO萩まち博にとって初めての大きなイベントで、全国の博物館ボランティアが集まり、各館のユニークな体験コーナーを萩博や城下町の文化財施設に展開



市長会のお食事対応(レストラン)

大きな会議や団体のお客様にもお食事の提供を開始

活動記録 ～これまでの10年を振り返って～



一斉清掃(大掃除)

12月の萩博でお正月を気持ちよく迎えるため、館の内外を大掃除



萩城下町絵図の販売開始

会員有志が城下町絵図の文字を解説・活字化、ショップオリジナル商品として販売



ミュージアムショップの移設

エントランス中央にあったショップコーナーを東側に移設



町印風呂敷の販売開始

展示物である町印提灯をモチーフにショップ班が企画デザイン



文化財施設の活用

市内の文化財施設で藍染めや襦の下張りながしなどのワークショップを開催



開館5周年記念イベント

活動成果のパネル展示やワークショップ、餅つきなどを実施



長州砲の里帰り (ワンコイラスト)

明治維新140年・日英国交150年を記念して長州砲が英国から里帰り



萩おもてなし大賞受賞

観光客に対するまごころのこもったおもてなしを実践する団体として表彰



まちじゅう博物館 情報コーナーの設置

エントランスの一角にまちじゅうの情報提供する情報コーナーを設置



萩セミナーハウス指定管理開始

萩市の研修施設：萩セミナーハウスの管理・運営を開始



萩の物語記録事業実施

会員有志が調査員となり、市内の各地域に伝わる物語を聞き取り・記録



文化遺産活用事業 実行委員会設立

地域のおたからのデータベース化をNPOまち博が事務局となって推進



民俗資料のレスキュー

萩市東部集中豪雨で被害を受けた須佐の民俗資料の安定化や移送作業を補助



萩セミナーハウスオープンデー

萩セミナーハウスを市民に認知・体験してもらうための機会として実施



プロジェクト未来遺産に登録

日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産にNPOまち博の活動が登録



萩まちじゅう博物館 おたから総会開催

文化遺産活用事業で再発見した各地域のおたからを市民とともに認定



NPOまち博10周年記念 活動発表会

オープニング行事として大板山たたら太鼓を上演



NPOまち博10周年記念 活動発表会

11月1日～16日にかけて各班のパネル展や体験ワークショップを実施

ひとことメッセージ

古写真班のこれから

古写真班は写真などをデジタル化している。これがタンスの肥やしになっては西山先生に恥ずかしい。そこで出前をはじめ博物館内で市民に公開しそれなりの成果を上げてきた。古写真を観ることによって過去と今を知り未来を語ることになり、自分自身も萩市にとっても前進に繋がるはずである。今に甘んじることなく次をホップしそれをステップしさらにジャンプし、古写真の真の価値が発揮され萩市の発展に寄与できると信じている。

古写真班 山中 信助



10年の活動をふりかえって

当初は、各班（無償班）の活動状況や、活動する皆さんの想い等を取材し編集して、ブログによる公開をめざしました。約2年で全班の紹介を終えましたが、担当者が多忙になるにつれて取材も停滞し始め、遂に、NPO事務局に作業を委譲しました。その後、テーマを「心に残る駅の風景」と定め、撮影した写真をパソコンソフトで動画化し、DVD公開しましたが限界を感じ、今年3月末で廃班することになりました。皆さん大変お世話になりました。

まち情報発信班
藤山 泰宏



病を克服した今思うこと

私は、NPO萩まちじゅう博物館が出来て萩博物館がオープンした4ヶ月後に脳出血で倒れ、2年間休みました。この10年間は、皆様に迷惑をかけないようにと自分の事だけで精一杯でした。今後はもっと周りの事にも気を配れるようになればと思います。現在ガイド班、歴史班、民具班に入って活動しています。いま期待している事は、歴史班の作業場所に、旧明倫小学校の教室が使用出来るようになることです。

歴史班 松浦 健夫



NPO入会時の思い出

平成17年3月、長い間親しんできたJR特急いそかぜ号が運行廃止。萩市民は勿論、鉄道ファンには大変寂しい思いをした時でした。丁度この頃NPOから各班の募集があり、歩くことと歴史探訪が楽しみの私にとって「おたから再発見と保存」を主な活動とする都市遺産部会に興味を持ち直ちに入会。その後、班の名前は変わりましたが、今も入会当初からの仲間達と楽しみながら、各所のおたから探しに歩き回っています。

まち博おたから情報班
塩飽 利直



開館10年 これからの10年

私がガイド班として活動を始めた当時、萩博物館のNPO活動の新しい取り組みの様子を全国各地より見聞のため来館されていたことを感じていました。それから5年。次の10年に向け、日々改善前進させるための努力が必要だと考えています。官民一体、協働と総合力で「お客様」を迎え、ただの郷土自慢でなく、お客様のニーズに合わせた「館内ガイド」を目指します。

萩の文化、歴史、自然を楽しんで頂きながら、お客様の心に少しでも届く力になればと思いますし次の世代に繋げていくことが大切だと思います。

ガイド班 繁澤 征夫



第2の人生

永いサラリーマン人生を卒業し、これからの生活パターンを苦慮している時NPO萩まち博の募集があり、新しい人生が始まりました。萩まちじゅう博物館構想に沿って作り上げていくNPOの活動は、白紙に近い人間関係と異業種の方々の思考を理解するのに、毎日が新鮮で且つ驚きの連続でした。これからも歴史遺産の発見や「まちづくり」、そして観光都市「萩」の発展に貢献出来れば良いと思います。又、新しい知識の吸収と仲間が出来た学芸サポートは何時までも続けたいものです。

松陰記念館班
川久保忠人



すみ子の一言メッセージ

博物館オープンから10年が経ちました。私は清掃班、館内外の清掃、草取り等、訪れたお客様に気持ちがいいなと思ってもらいたい。そんな思いで活動してきました。来られたお客様に、元気で挨拶、道案内、夏みかん(橙)の説明等お客様と話を楽しいひとときもあります。ボランティア活動は、花と緑、菊の三本仕立て、季節の花の植栽等、仲間と楽しく活動しています。これからの10年もう始めましたね。

花と緑の推進班 川久保すみ子



ちょっとのぞいてみてごらん

夜空に双眼鏡を向ける。あの星から△度に……
薄い雲のような影が！ピンゴ!! M33を見つけた瞬間だった。何回も挑んでは失敗し、繰り返しの練習が生んだ成果だ。
天文分野は、自分の目で実際に見てみるのが大切です。星を見て「きれい」と思うだけでもいいし、1～2年もやれば基礎一般がわかります。他にも神話・民話や民俗、暦など、入口は沢山ありますので、どうぞ気楽に、まずは望遠鏡を覗いてみてください。

天文班
長岡 睦夫



日々新たな気持ちで

「こんにちは」と声をかけながら入館者をお迎えしています。日本各地や海外からも来館されており、時には「どこから来られましたか」と尋ねることにより、相手の土地や萩市のことで話がはずむこともあります。ゆったりと展示物を見ていただき、気持ちよく時を過ごしていただけるように心がけています。「萩を訪ねてよかった!!」と思っていただけるよう、次の10年に向けて日々新たな気持ちで入館者をお迎えしたいと思っています。

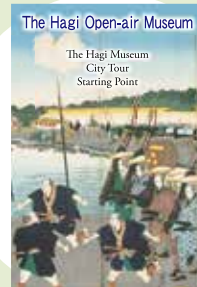
受付班 清水 恵子



Different countries have different cultures.

様々な国が様々な文化を持っている。私達は外国の本を読んだり、外国人と直接接触する中で、異言語、異文化に触れ、新たな心のときめきを覚えます。私達は外国人向けの英文資料作成や英語でのtour guide等国際化に向けた様々な活動を行い、この度は萩市の英語観光リーフレットを出版しました。私達の活動が萩と世界の国々との架け橋になるよう日々努力しています。ご一緒に外の世界に目を向けてみませんか！

外国語班 黒川 建一



ボランティアじゃあなくて遊びだ！

「こっちのお年寄りボランティアをして働いておられるんですね、私達の国ではお年よりは公園で遊んで過ごしていますよ!」。昨年11月の事だけど「萩まちじゅう博物館」の研修に来られたヨルダンの方々が例会を見学に来られて、私達がパソコンの画面を見て探してきた古民家の評価をしている様子を見ながら仰った。ちょっと待った、頭は薄いけど未だ年寄りじゃあないぞ!それに手分けして古民家を探してホームページに公開しているのは、ボランティアと思ってやっているんじゃないんだ。遊びのつもりで自分たちでテーマを決めて、楽しみながらやってるから何年も続いているんだ!

まち博おたから情報班 村上 泉



楽しく、仲よく、頑張ろう

平成23年12月に、NPO萩まちじゅう博物館に加入し、早いもので4年が経過しました。現在、守衛清掃班と民具班に加入して頑張っております。民具班では、現在9名の仲間で、学芸員の指導を受けながら「楽しく、仲良く、頑張ろう」を合言葉に和気藹々と日々作業を楽しんでおります。作業をしていく中で、先人達が知恵を出し、物づくりの道具を考え、工夫を重ね多くの民具を作っていたことに驚くと共に、過ぎ去った子供の頃を回想しております。今後の課題としては、整理した展示物を広い場所で多くの人達に見て貰い、楽しんで貰うことが私の夢です。

民具班
河村 建治



ひとことメッセージ

あいと藍

学芸サポート班が枝分かれして約7年、タデアイの種の伝承・萩の色文化探究・仕事着を始めとした衣類保存の為に虫干しや資料整理。畑作りから行うタデアイ栽培や衣類の虫干しは、天候に振り回されながらも楽しく、どの作業も1年の長さを忘れる程です。今年は、未熟ながらも藍で染めたハンカチ販売開始、古地図に見る藩営「藍玉座」の広報で、班としての活動の幅が広がりました。ボランティア班で、「染、織、衣」の文化に触れたことは、再発見、再感動の連続で、本当に感謝感謝の日々です。

あい班 弘中のり子



あっという間の10年でした

オープンから10年、過ぎてみればあっという間でした。市民館の研修室を借りてのメニュー検討会を初めとして、最初は「カフェ」の名称からスタッフ12人で取り組み、2年後「レストラン」に店名を改めました。メニューも増やしNPO萩まち博会員として誇りをもちながら、月1回の勉強会を続けるなど努力を重ねた結果、今では、市外からの予約もいただけるようになりました。これからの10年も、お客様から満足いただけるよう、「笑顔」と「おもてなし」の心をモットーに頑張ります。

レストラン班
秋田 華子



桜 貝

9年前、萩市民になった時から博物館に年パスで来ていました。初めて見るシェリングバーにひかれ、そこで桜貝の二枚合わせったのを見つけた時は、感動でした。今その貝を栗屋班長の元で、少しでも美しいのをたくさん見つけたいと、採集に余念がありません。

自然おたから班 植木 功子



研修班の10年を振り返って

研修班の10年を振り返って、楽しかったのが市民講座の開設である。市民の正しい歴史認識のもと、観光客に充分なおもてなしが出来るようにという願いからの開設であった。受講者の希望を生かし、講師選定に苦労しながらもいろんな分野の専門家や学芸員の先生方の協力を得て講義を行った。実施後の受講生の良好な反応を見て、研修班一同ほっとしたことが毎度の事でした。しかし、年数を経るに従い、講師の人選や予算の制限から運営が厳しくなったこと、また、受講者の皆さんのガイド能力アップもあって、やむなく中止に踏み切ったが、今なお、講義の録音を冊子にした資料の再発行について、会員からぜひお願いしたいとの声があることは嬉しい限りである。

研修班 弘長 純忠



浜の活動

夏の砂浜、麦藁帽子を被った、平均年齢?歳の若者達が貝殻を拾っている。同じく冬には黄色の防寒コートの花を咲かせている。シェリングバーの為に熱帯貝の調査の為に楽しんで活動している。でも悲しいことがある。それは浜の汚さである。ハングル文字の容器や種々のゴミの山だ。班員達はゴミにも負けず目を凝らして探す。大きな宝贝や珍しい貝を見つけた時は喜びと感動である。栗屋班長の号令の元にイベント参加を含めこの10年班員全員楽しく協力し、歩んできた。子供達の喜ぶ顔の為に。

自然おたから班 植木 克行



海洋班から自然おたから班へ

自然おたから班は平成24年4月、旧学芸サポート海洋班から分離独立してボランティア活動事業部門で活動しています。萩近海で貝などの萩の「自然のおたから」を拾い集めて萩の海の魅力を未来に引き継ぐための調査・研究に取り組む萩博物館の海洋生物部門にタカラガイなどの「指標種」(熱帯性貝類)を提供し、余品を萩学展示室「シェリングバー」の貝殻採集体験コーナーで入館者にプレゼントしています。NPO萩まち博イベント企画にも貝を使用してのワークショップに参画しています。

自然おたから班
栗屋 眞明



魅力あるショップづくりを目指して

私は、NPO萩まちじゅう博物館開設から7年経った平成23年6月にショップ班に入りました。レジなど使ったことのなかった私ですが、当時の班長さん指導のもとで今まで何とかやってこられました。現在、大河ドラマ放映、世界遺産登録などでショップの売上は伸びていますが、これからもオリジナル商品の開発や萩博物館にふさわしい商品の選定などを行い、魅力あるショップづくりを行っていこうと思います。

ショップ班 岡田 久恵



貝採集の想い

私は、泳ぐことが好きでしたので、夏の海が大好きでした。なので、海洋班（現在は自然おたから班）に入り、夏の海辺に貝を拾いに行き、初めて寶貝（後で知ったのですがいつでも良くとれるメダカラでした。）を拾った時は感動しました。その後班を離れ、また復活しました。たま～に綺麗な貝や珍しい貝（自分の中で）を拾った時は心の中で、小さなガッツポーズをします。それがあるから夏の暑さや、冬の寒さに耐え(?)貝採集に行くのかも知れません。

自然おたから班
大橋 恵子



寄贈レコードがある限り活動を

現在レコード班は、市民の皆様から寄贈されたレコードの分類・整理をし、番号を付け目録作成を行っております。寄贈されたレコードは、保存だけでなく使用可能なものは、萩博物館や浜崎町おたから博物館等各種イベントで、ミニレコード演奏会を催して活用しております。会場で音楽が流れると、お客様は懐かしさに昔を振り返られ会話が弾み、交流も生まれます。会員は少ないのですが、寄贈レコードがある限り地道にボランティア活動を続けていくつもりです。

レコード班
末永美智子



思いつくままに

今は自然おたから班と云う名称ですが、その前は海洋班でした。最初の頃は貝の採集と洗浄とタカラ貝の種類の数を調べることでした。又、夏の特別展示会のクイズの正解者への商品の発送等のお手伝いもしていました。採集について行くようになり貝にも貝にふさわしい名前がついている事を知りました。今では萩博物館内で「シェリングバー」と云う海に行かなくても貝拾いの出来る場所があり、来館者も珍しそうに拾って帰られるのを横目で見ながらこっそり微笑んでいます。

自然おたから班 伊藤 治美



今後の「萩まちじゅう博物館」発展の課題

「萩まちじゅう博物館」事業に市と民間が協働で取り組み10年が過ぎました。紆余曲折ありながらも組織として充実し、整いつつあります。NPOのボランティア活動も、各班が経験を重ね素晴らしい成果を上げています。これからの10年は、蓄積されたノウハウを地域に広げていき「学ぶ観光」に活かすべきと考えます。官と民が、どこまで対等の立場で、互いの得意分野を連携できるかが、今後の「萩まちじゅう博物館」の発展の課題だと思います。

民話語り部班 伊藤 邦恵



NPO 萩まちじゅう博物館

更なる精進を

萩セミナーハウスの職員として皆様のお仲間に加えていただけてはや4年半が経とうとしています。この施設をより多くの方々にご利用いただき、親しんでいただけるよう努めてまいりました。この間、たくさんのNPOの方の応援をいただきましたことは、私たちの大きな力であり、感謝に堪えません。ますます、この萩セミナーハウスが、人の笑顔の集まる場所として、更に賑わうように、誠心誠意精進してまいりたいと思います。

萩セミナーハウス
吉村 玲子



NPO萩まちじゅう博物館の歩み

2003 → 2005

	NPO萩まちじゅう博物館	萩まちじゅう博物館
平成15年 (2003)	<ul style="list-style-type: none">11月 萩まちじゅう博物館のコアである萩博物館において、無料ゾーン（ミュージアムショップや喫茶）や館内ガイド等の運営・管理を行いながら、萩まちじゅう博物館全体の活動を支える市民団体としてNPO法人設立案が浮上し、検討を開始する。	<ul style="list-style-type: none">6月 まちじゅう博物館整備検討委員会が設立 ⇒堀内・浜崎・藍場川・旧松本村の4部会を設置10月 萩まちじゅう博物館構想策定 整備検討委員会が推進委員会に組織変更11月 まちじゅう博物館シンポジウム開催 拠点施設・萩博物館の建物が完成
平成16年 (2004)	<ul style="list-style-type: none">2～6月 NPO萩まちじゅう博物館設立準備会実施（全4回）6月18日 NPO萩まちじゅう博物館設立 初代理事長に高木正熙氏就任 NPO萩まちじゅう博物館会員募集8月 萩博物館オリジナルグッズ・カフェ（軽食喫茶）メニュー選考委員会を開催 社員協議会開催9～10月 会員向け研修会実施（全5回） NPO萩まちじゅう博物館が萩博物館、旧久保田家住宅の管理運営業務受託開始12月 萩博物館、旧久保田家住宅の門松づくり、飾り付け（以後毎年実施） 萩博物館館内一斉清掃（大掃除）を実施（以後毎年実施）	<ul style="list-style-type: none">4月 まちじゅう博物館条例を施行 高木萩まちじゅう博物館長が就任 まちじゅう博物館推進室を開設7月 まちじゅう博物館推進室が推進課へ昇格8月 第1回まちじゅう博物館推進委員会の開催11月11日 萩博物館・萩まちじゅう博物館開館
平成17年 (2005)	<ul style="list-style-type: none">2月 ワンコイントラスト運動を開始 （萩市とNPO萩まちじゅう博物館でワンコイントラスト委員会を設置）3月 消防・避難訓練を実施（以後毎年実施）	<ul style="list-style-type: none">3月 1市2町4村の合併により新萩市が誕生 （萩まちじゅう博物館条例も新萩市の条例として施行） まちじゅう博物館基本計画・行動計画策定 笠山部会設置

2005 → 2007

	NPO萩まちじゅう博物館	萩まちじゅう博物館
平成17年 (2005)	<ul style="list-style-type: none"> 4月 NPO萩まちじゅう博物館市民講座開設 5月 「昔ながらのおもちゃで遊ぶ広場」を開催（以後毎年開催） 6月 萩博物館館外一斉清掃（草取り）を実施（以後毎年実施） 10月 ボランティアメッセ2005 in萩を開催 11月 萩ふるさとまつりに参加（以後毎年参加） 	<ul style="list-style-type: none"> 7月 萩博物館入館者10万人突破 11月 萩博物館が手づくり郷土賞「地域整備部門」に認定 第1回萩ものしり博士検定を実施（初年度は修士課程のみ。以後毎年実施）
平成18年 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> 4月 井上勝旧宅門修復（ワンコイントラスト第1号物件）竣工 6月 2代目理事長に久保田拓造氏就任 9月 萩城下絵図の活字化、NPO萩まちじゅう博物館オリジナル商品として販売開始 ボランティアメッセ in 九博に参加 10月 猿田彦面山車修復（ワンコイントラスト第2号物件）完成 11月 レストラン厨房の増設 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 土原部会設置 6月 ボランティアガイド・文化財施設管理の一元化協議開始
平成19年 (2007)	<ul style="list-style-type: none"> 1月 NPO萩観光ガイド協会が設立（旧久保田家住宅の管理を移管） 6月 ショップの移設（エントランスホール中央からレストラン側へ） 7月 平安古備組道具類の修復（ワンコイントラスト第3号物件）完成 	<ul style="list-style-type: none"> 4月 ワンコイントラスト運動に（財）萩文化財保護協会が参画

NPO萩まちじゅう博物館の歩み

2007 → 2009

	NPO萩まちじゅう博物館	萩まちじゅう博物館
平成19年 (2007)	<ul style="list-style-type: none">7月 市と協働で城下町萩・筋名復活委員会を設立、 筋名調査事業を市から受託9月 山口県が県外向け情報発信機関誌「ひとごころ 山口」でまちじゅう博物館を紹介10月 筋名入りサインプレートの埋め込み開始11月 「萩城下町・筋名まち歩き」と筋名シンポジウム を開催	<ul style="list-style-type: none">9月 萩博物館常設展示リニューアルオープン11月 萩博物館いきもの発見ギャラリーオープン
平成20年 (2008)	<ul style="list-style-type: none">5月 町印風呂敷を企画デザイン、オリジナル商品と して販売開始8月 長州砲が英国より里帰り（ワンコイントラスト 第5号物件）10月 御網代車の修復（ワンコイントラスト第4号物 件）完成 文化財に親しむ会「筋名で萩を散策しよう！」を 開催（萩文化財保護協会主催・筋名復活事業）	
平成21年 (2009)	<ul style="list-style-type: none">1月 NPO萩まちじゅう博物館HP開設2月 NPO萩まちじゅう博物館設立5周年記念活動発 表会を開催6月 NPO萩まちじゅう博物館設立5周年8月 文化財施設内でNPOまち博の活動を開始（紙芝 居、裂き織り、藍染め、襖の下張り剥がし、古 写真の展示） 金沢市で開催された「歴史都市推進フォーラ ム」でまちじゅう博物館を紹介9月 伊藤博文公先祖の墓碑の修復（ワンコイントラ スト第6号物件）完成	<ul style="list-style-type: none">1月 「九州・山口の近代化産業遺産群」がユネス コの世界遺産暫定一覧表に追加記載2月 須佐部会設置8月 萩博物館入館者50万人突破

2009 → 2012

	NPO萩まちじゅう博物館	萩まちじゅう博物館
平成21年 (2009)	<ul style="list-style-type: none"> 9月 文化財活用事業の一環で、旧久保田家住宅にて民具展示 札幌市で開催された「創造都市交流シンポジウム」でまちじゅう博物館を紹介 	
平成22年 (2010)	<ul style="list-style-type: none"> 1月 群馬県桐生市で開催された「Creative Japan 全国大会 in 桐生」でまちじゅう博物館を紹介 3月 松陰記念館の管理運営を市から受託 10月 高杉晋作立志像除幕（ワンコイントラスト第7号物件）除幕式に伊勢谷友介氏が参加 11月 岩手県盛岡市で開催された「全国町並みゼミ」でまちじゅう博物館を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 旭部会設置
平成23年 (2011)	<ul style="list-style-type: none"> 2月 NPO萩まちじゅう博物館が「萩おもてなし大賞」受賞 4月 萩データベース構築事業開始 6月 語り部育成講座開講 8月 萩・維新塾『笠山プロジェクト』開催 11月 萩セミナーハウス指定管理開始 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 福栄部会設置
平成24年 (2012)	<ul style="list-style-type: none"> 3月 萩データベース公開 6月 萩の物語記録事業開始 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 川上部会設置 6月 田万川部会設置 7月 むつみ部会設置

NPO萩まちじゅう博物館の歩み

2013 → 2016

	NPO萩まちじゅう博物館	萩まちじゅう博物館
平成25年 (2013)	<ul style="list-style-type: none">1月 萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業実行委員会設置6月 奇兵隊隊服の再現（ワンコイントラスト第8号物件）完成7月 萩まちじゅう博物館文化遺産活用事業開始8月 萩市東部集中豪雨災害によって被害を受けた歴史民俗資料館の資料レスキューに、あい班や民具班などの会員有志が参加12月 NPO萩まちじゅう博物館の活動が日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に登録	<ul style="list-style-type: none">7月 萩市東部集中豪雨災害が発生（7/28）
平成26年 (2014)	<ul style="list-style-type: none">3月 第1回萩おたから総会開催 萩おたからデータベース公開・萩まちあるきマップ発行6月 3代目理事長に須子義久氏就任 NPO萩まちじゅう博物館設立10周年11月 NPO萩まちじゅう博物館10周年記念活動発表会開催	<ul style="list-style-type: none">2月 第1回萩・幕末維新検定実施7月 萩博物館入館者100万人を突破
平成27年 (2015)	<ul style="list-style-type: none">1月 中央公園に久坂玄瑞進撃像（ワンコイントラスト第9号物件）建立	<ul style="list-style-type: none">7月 「明治日本の産業革命遺産」世界文化遺産へ登録
平成28年 (2016)	<ul style="list-style-type: none">1月 萩・世界遺産ビジターセンター管理・運営業務受託開始	

編集後記

NPO萩まちじゅう博物館の会員として2年目という、経験の浅い私が、当法人の10周年記念誌の編集に携わることができたこと、光栄の至りであります。

この記念誌のタイトルは、「共に歩む」～これまでの10年 これからの10年～ としております。

これは、萩市のまちづくりの基軸である「萩まちじゅう博物館構想」のもと、NPO萩まちじゅう博物館が市や市民と共に10年間歩み続け、多くのノウハウやデータを蓄積してまいりました。この歩み続けてきた10年を振り返るとともに、すでに歩み始めておりますこれからの10年では、これまでの活動の充実は勿論のこと、会員規則第2条第2項第1号にも「常にひとつ上をめざして活動しましょう。」とあるように、これまで蓄積してきた実績を活用して、新たな活動の展開を模索するきっかけとなればとの思いを込めたタイトルとしております。

会員の皆様にはこの主旨をご理解いただくとともに、これからの活動をどう展開していくか、初心に立ち返り再検討されてみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、本誌にメッセージをお寄せいただいた萩市長野村興児様、座談会にご協力いただいた北海道大学観光学高等研究センター西山徳明教授及び当法人の歴代理事長、ひとことメッセージをお寄せいただいた多くの会員の皆様、そして何よりも編集にご尽力をいただいた、編集委員及び事務局の皆様には厚くお礼を申し上げ、私の勝手な思いを込めた編集後記といたします。

(編集委員 田辺 信)

編集委員及び事務局のささやき

編集委員 尾崎 洋子

“こんなこともあったなあ”“これからも思い切り活動するぞ”そんな思いが沸々と湧き立って欲しいなあ、そんな願いを記念誌に写し込んだ積りでです。

編集委員 藤山 泰宏

21世紀・・・私たちのNPO活動・・・平和な時代の先駆けであれ。そんな思いが湧いてきました。

編集委員 川久保 忠人

柄にもなく編集委員になったものの、お役に立ったのか？でも、メンバーとの楽しい会話の中から素晴らしい記念誌が出来ました。新たな経験を頂き感謝します。

編集委員 吉屋 紀子

NPO萩まち博会員の皆様、そしてNPOに係る全ての方のおかげで10周年記念誌は出来上がりました。

これからの10年もNPO萩まち博が更なる飛躍をされます事を期待します。

編集委員 金田 農

「萩まちじゅう博物館を市民の手で」市民が主役のまちづくりの取組は、今や国内のNPO活動の先駆的な取組として注目されています。これからも、誇るべき萩のまちの魅力を高めるための取組を共に進めていきましょう。

事務局 山本 明日美

10年の活動を振り返るための年表や写真の整理は大変でしたが、日々の活動の積み重ねと振り返りがNPO萩まち博の姿をつくっていくのだ、ということを実感しました。また次の節目に記録誌を作れるよう、写真や文字で活動をしっかり記録・発信していきましょう！

事務局 宇野 亜由美

会員の皆様からの一言メッセージに感動しました。これからも、NPO萩まちじゅう博物館が会員の皆様とともに発展していった欲しいなと思います。

発行者 NPO萩まちじゅう博物館
発行日 平成28年3月
代表者 理事長 須子義久
住 所 萩市堀内355番地 萩博物館内
連絡先 0838-25-3177
U R L www.npomachihaku.com

